



写真-1 東雲橋から網干川下流方向を撮影（令和3年5月）

■ 揖保川舟運と瀬戸内海運の中継基地～網干湊

写真-1 は、一般県道 222 号網干港線の東雲橋（しのめばし）から、二級河川・大津茂川（おおつもがわ）の右支川・網干川（あほしがわ）下流方向を撮影したものです。前方に見える水管橋は右岸側にある化学工場への工業用水の送水管で、沿岸には多くの船が係留されています。

江戸時代、ここは網干湊と呼ばれて、上流の河岸から積み出された年貢米や薪炭、宋粟鉄などの商品が、高瀬舟で網干湊に運び込まれ、ここで廻船に積み替えられて、西の室津や東の飾磨津、さらには江戸・大坂までも回漕されたとか。資料によると、1500 石積みの廻船で、江戸までの往路が 22 日、帰路が 16 日かかったという記録があります。また、網干湊は大坂からの下り荷物を播州北部へ運ぶための中継基地としての役割も果たしていました。

現在の網干川（L=1,566m）は、上流端が揖保川堤防に設けられた水門、下流端が大津茂川への合流点で、東雲橋より下流は港湾区域でもあります。

■ 遠浅で大型船が入港できなかった網干湊

『網干町史』によると、「元禄 11（1698）年の地図には、磯より遠浅 14 町 20 間（≒1.5km）、満潮の時は五十石船が荷を積んで入出港できる。大潮の時は、二百石から船で入出港できる。干潮の時は、小船も出入りできない。」とあり、新在家の接岸地は一尋^{*1}（≒1.8m）、沖合 12、3 丁（≒1.3～1.4km）で 7～10 尋（≒12.6～18.0m）の水深を示し、興浜もまた陸より 5 丁から 1 里（545m～4km）の間は 6、7 尋（10.8～12.6m）、それより沖合は 9～17、18 尋（≒16.2～30.6、32.4m）とあり、濱田も接岸地一帯は 2、3 尋（≒3.6～5.4m）とあります。

表-1 は、積載石数毎の廻船の深さを示しています。船が安全に航行するために必要な喫水深※2(きつしん)は、余裕を見込むとほぼ船の深さと同等といえるので、例えば 200 石積み船であれば、約 1.3m の水深が必要となります。

揖保川河口部は遠浅で必要な水深が確保できないため、瀬戸内海を航行する大型の廻船は満潮時しか利用できなかったようです。なので、揖保川上流域から下ってくる高瀬舟は、揖保川から分派した網干川の沿岸に係留場所として、ここで一旦荷を下ろします。川沿いには船荷の積み下ろし場(雁木)が整備されていました。荷は、上荷船※3(うわにぶね)に積み替えて沖に停泊する廻船に積み込むことになります。

網干 3ヶ村(興浜、新在家、余子浜)は揖保川流域の物資の集散地として栄え、天保 2 (1821) 年には出石河岸から川下げされた高瀬舟は延べ 2 千艘を超え、大量の物資がさばかれています。

また、余子浜地区には成田屋・土田屋・安田屋といった廻船問屋が店を構え、東雲橋周辺には舟頭宿や倉庫、荷役場などがあったそうです。大名の年貢米蔵元の安田屋、城米蔵元の成田屋などは、上荷船や廻船を所有して、幕末には醤油をこれらの船に積んで大坂へ運ぶなどで繁栄を極めていました。

なお、余子浜、興浜、大江島、濱田といった地名からもわかるように、かつてはこのあたりまで海だったと考えられます。

積載石数	深 さ	
100石積	3.2尺	0.96m
200石積	4.3尺	1.29m
300石積	5.0尺	1.5m
500石積	6.0尺	1.8m
700石積	7.2尺	2.16m
1000石積	8.5尺	2.55m
1200石積	9.0尺	2.7m
1400石積	9.7尺	2.91m
1600石積	10.3尺	3.09m
表-1 廻船の深さ		

出典：石井謙治

『近世の水上交通・海洋技術』

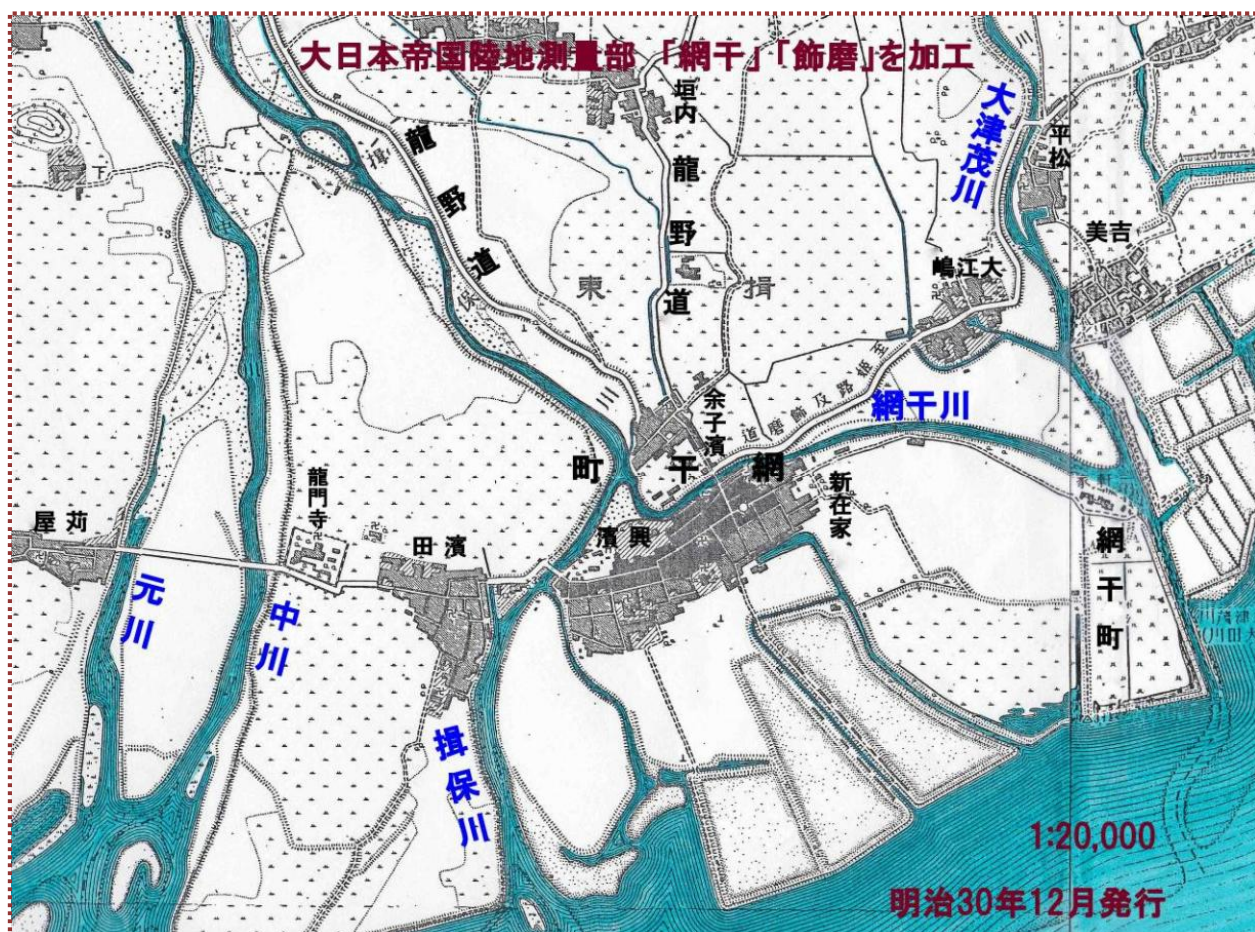


図-1 明治 30 年頃の網干川付近の地図

※1 尋(ひさ)：大人が両手をいっぱい広げた長さで 6 尺(≒1.8m)

※2 喫水深：船舶が水に浮いているときの、船体の最下端から水面までの垂直距離。船脚(ふなあし)。(出典：デジタル大辞泉)

※3 上荷船：江戸時代、本船と波止場との間を往復して、荷物の積み卸しをした喫水の浅い船。瀬取船、茶船と同じで、20 石積みから 40 石積みがつうだが、所により大きさ、船型に多少の相違がある。

■ 分割統治されていた網干 3 ヶ村

網干 3 ヶ村（余子浜、新在家、興浜）は、万治元（1658）年から明治維新まで、幕府領・龍野藩・丸亀藩に分割統治されていました。網干川の北側に位置する余子浜地区は幕府領、南側は興浜地区が京極家（丸亀藩）、新在家地区が脇坂家（龍野藩）の所領に分割されていて、その境となっていた掘割には境橋という名の石橋が架かっていました。昔は、ここに通行門が設けられ、朝夕時刻を定めて門が開閉されていたそうです。

明治になって藩による統治は終わり、明治 4（1871）年に龍野県、生野県になりましたが、同年中にそっくり姫路県に移行、その 1 週間後に飾磨県に改称され、さらに明治 9（1876）年に兵庫県に統合されました。



写真-2 道路脇に保存されている境橋の親柱と高欄

昭和 60（1985）年に市道拡幅と下水道工事のため掘割は埋め立てられ、石橋も撤去されましたが、慶応元（1865）年の記念銘のある親柱と高欄は、道路脇に保存されています（写真-2）。

■ 今も残る網干湊の往時の街並み

網干湊は、揖保川の舟運と瀬戸内海航路の中継拠点の港町として古くから栄えていました。明治以降、陸上交通の発達に伴い舟運は衰退していきませんが、室津道沿いを中心とした市街地には往時をしのばせるような町並みが残されています。

① 加藤家住宅

加藤家は、江戸時代に年貢米の収受や保管・売却の蔵元で、揖保川の舟運を利用して廻船業を営み、屋号^{※4}を成田屋と称しました。揖保川を舟で遡って龍野で小麦・醤油・薪を仕入れ、それらを大坂に運び、帰りの便で大坂の物資を龍野に運んでいたそうです。一方、網干特産の塩を使う醤油や素麺の製造業も営んでいたとか。明治から大正期に最盛期を迎えています。



写真-3 成田屋の屋号を持つ加藤家住宅

江戸時代に分割されていた網干地区が、明治 22（1889）年 4 月 1 日 町村制施行に伴い、揖東郡新在家村・興濱村・余子濱村・大江島村、揖西郡濱田村が合併して揖東郡網干町が発足しますが、その時、初代の網干町長に就任したのが加藤家 10 代目当主の加藤邦太郎氏です。

加藤家住宅は、主屋が文久 2（1862）年の建築で、桁行（一棟の家の長さ）20m、梁間（建物の短手方向）4.7m の屋敷です。奥に内倉、離れ座敷、その奥に揖保川が眺望できる 3 階建ての浜座敷があります。平成 18（2006）年 10 月に都市景観条例に基づく「都市景観重要建築物等」に指定、さらに平成 21（2009）年 1 月に主屋ほか 7 件が文化庁の「登録有形文化財（建造物）」に指定されています。

② 山本家住宅

かつて呉服屋を営んでいた豪商の邸宅です。明治初期に建てられた和風の主屋と、網干町長、網干銀行頭取を務めた山本真蔵氏が大正 7（1918）年に建築した洋館、離れ和室が繋がっています。

伝統的な町並みの中で、3 階を望楼とした黒塗壁の洋館は興浜地区のランドマーク的存在となっています。平成元（1989）年 7 月に姫路市内で最初に「都市景観重要建築物等」に指定されました。住宅は姫路市に寄贈されています。



写真-4 望楼が特徴の山本家住宅

③ 片岡家住宅

片岡家は、脇坂龍野藩南組（網干組）の大庄屋で、網干・新在家の浜で開発された塩田を持ち、造り酒屋も兼ねていました。揖保川を下って来る高瀬舟の荷物を集め、沖の廻船に荷積みする仕事を受け持ち、荷は江戸、京都、大坂へ運ばれました。

住宅は、元禄 15（1702）年建築の町家で、姫路市で最古といわれています。平成 23（2011）年 10 月に「都市景観重要建築物等」に指定されています。



写真-5 片岡家住宅

④ 水井家住宅

揖保川に架かる本町橋の近く、丸亀藩陣屋門の道路を隔てた向かい側にあります。大正 11（1922）年建築の主屋は、黒い漆喰の外壁に囲まれ、大正 3（1914）年建築の土蔵まで、間口は 13 間（≒23.6m）とのこと。

水井家は、揖保川の水運を利用して、戦前まで材木問屋を営んでいたこともあって、柱・梁などに使用している材木は豪壮で、歴史的な風格がある建物です。

平成 23（2011）年 10 月「都市景観重要建築物等」に指定され、住宅は姫路市に寄贈されています。



写真-6 水井家住宅

※4 屋号：一門・一家の特徴を基に家に付けられる称号のことである。江戸時代では、原則としては身分制度により武士以外の者が苗字を名乗ることが認められていなかったため、人口が増加するにつれ同地域内で同じ名を持つ者が増え、個人を特定・判別しにくくなった。旧来の集落単位では人別が出来なくなり、商人や農家が、集落内で取引あるいは日常生活に不便を生じたことから、家ごとに名称を付け、これを人別判別の材料として使うようになった。



図-2 網干川付近の地図

■ モノローグ

江戸時代の領主は年貢を米で徴収していますが、領主は年貢として集めた米を食用米や備蓄米などとして使用する分を除いて市場で換金するため大坂や江戸に送りました。年貢は、領主指定の蔵に納めるまでが村の責任です。年貢の納入に際し、村々の大きな負担になったのは年貢米の輸送でした。

藩の場合、城下町や港町に置かれた蔵まで輸送して納入しますが、きつかったのは幕府領です。幕府領の年貢米は、江戸の浅草（現・東京都台東区）にあった御米蔵まで運んで納める必要がある（廻米）ことから、村々は、輸送費の大部分を負担するほか（海運は幕府負担）、人馬や川船など業者も含めた輸送手段の手配、経費の立替や精算という実務全般を担当するとともに、選出された責任者 2 人が江戸まで付き添っています。きついと思いますが、村では屈強な若者を選任して経験を積ませたようです。

ガザニア

キク科クンショウギク属の多年草。高さ 15～40cm ほどで、根出葉が数多く叢生する。葉はへら状の線形～披針形、羽状に裂けるものもある。長い花茎の先に大輪の頭花を単生させる。花は日が当たると開き、夕方以降や曇りの日は閉じる。日当たりと水はけ、水もちがよく、通気性のある土壌を好む。網干川沿いの植栽帯に咲いていた。



写真-7 網干川沿いの植栽帯に咲いていたガザニア

【参考資料】

- 1 『歴史と景観の町・網干を歩く』 あぼし人と景観まちづくりの会編著 平成 26 年 5 月
- 2 『街道の日本史 39 播州と山陽道』 三浦俊明・馬田綾子編著 平成 13 年 10 月
- 3 『文化財見学シリーズ (33) 網干地区をたずねて』 姫路市教育委員会文化財課 平成 21 年 6 月改定
- 4 『網干町史（復刻版）』 網干町史刊行会 昭和 26 年 1 月
- 5 『加藤家住宅、片岡家、旧水井家』 ブログ『ふるさと網干』 平成 29 年 4 月
<https://ameblo.jp/yassan2017/entry-12249561737.html>
<https://ameblo.jp/yassan2017/entry-12280163722.html>
<https://ameblo.jp/yassan2017/entry-12252590432.html>
- 6 『桁行、梁間』 精選版日本国語大辞典
- 7 『海の東海道～2 千石船、3 江戸時代の港湾施設、4 伊豆の湊』 社団法人 静岡県建築士会 平成 5 年 3 月
<https://www.tcp-ip.or.jp/~ask/urbanism/uminotoukaido/sea/sea01/1012.htm>
<https://www.tcp-ip.or.jp/~ask/urbanism/uminotoukaido/sea/sea01/1013.htm>
<https://www.tcp-ip.or.jp/~ask/urbanism/uminotoukaido/sea/sea04/1040.htm>
- 8 『近畿地方：姫路市網干区の町並』 「古い町並みを歩く」HP
- 9 『網干まちなかあるき』 平成 24 年 3 月
- 10 『ガザニア』 EVERGREEN 植物図鑑
<https://love-evergreen.com/zukan/plant/16082.html?page=1>
- 11 『年貢米の江戸回送』 国税庁 HP
<https://www.nta.go.jp/about/organization/ntc/sozei/quiz/1106/index.htm>

※発行：令和 3（2021）年 12 月 『ひょうご水百景』No.138

改訂：令和 8（2026）年 7 月 『ひょうご水百景』No.138